

## 追 憶

福井県 北 島 次 男

私は大正十二（一九二三）年十月二十八日、福井市笹谷町に生れ、両親と男兄弟三人の五人家族で、私は次男でした。家は農業で、田圃や畑が六反か七反所有し、耕作していました。当時としては、中流の生活でした。

幼少年時代は不景気の嵐が吹き、人心も荒れていました。しかし北陸特有の土地柄があるいは氣候風土の故か、人心は反比例して明るく、情が深く、他人には親切でした。小学校卒業後、市内に父方の叔父が手広く商売をしていたので、お世話になり、店員見習として奉公しました。

昭和十四（一九三九）年三月、兄が急逝しました。父は非常に落胆し、そのために発病して同年八月に逝去しました。私は、家へ帰って、大黒柱として母を支え、弟の面倒を見ながら、一生懸命

に農業に精励しました。農耕用の牛やそれに伴う種々の雑用が多く、大変でした。弟もようやく青年となり、手助けをしてくれるようになりました。青年学校も義務化されたが、私は家業のために免除となり、農業に精励せよということでした。

昭和十八年八月に徴兵検査があり、第二乙種合格となり、同年十二月一日、役場より「第一補充兵役編入」の知らせが係員より伝達されました。当時は、各戦線にわたって激戦が相次ぎ日本軍の

旗色も少し悪くなっていました。私にも早速「召集」が来るぞと覚悟していた昭和十九年二月一日、ついに「臨時召集令状」がきて「歩兵第五十一連隊補充隊に入隊せよ」というものでした。そして三重県一志郡久居町にある、「中部第百十六部隊にて初年兵教育を受けよ」というものでした。

早朝から日没まで、へとへとに疲れるほど野外訓練を行い、夕食後には典範令の勉強でした。第一期の教育期間中は寝ることと食らうことが第一の楽しみで初年兵は哀れなものでした。

初年兵教育も三カ月で第一期の検閲を経て一応修了しました。

四月二十九日、非常呼集で集合整列すると、中隊長より命令が伝達されました。

「貴様たちは陸軍飛行場設定部隊だ」と直ちに引率され、そのままの姿で、管内を通過しての移動でした。誠に簡単な引越しでした。部隊は豊橋の老津所にて「航空練習の飛行場設定隊」で正式名称は「陸軍飛行場設定練習部」でした。

それから十日後によく「正式名称を言う」として発表があり「第一二六野戦飛行場設定隊」と命名され同時に出陣ということになりました。そこで豊橋駅まで行進し、「万歳、万歳」の旗の波で送られました。列車は満員のすし詰めでした。

汽車は汽笛一声、西方に向って疾走、三十日下関着、門司に渡って乗船したが、船団編成のため三日ほど停泊後、夜陰に紛れて静かに出航しました。当時の陸軍、海軍共に秘密行動が多く、スパイ等の行動に厳重な注意が払われていました。

船団は朝鮮半島の南岸を経て黄海に入り、大陸沿岸を南下、「台湾高雄に寄港する」と知らされた直後でした。後方を縦走中の僚船一隻が敵潜水艦の魚雷攻撃で一瞬に撃沈されました。大多数の戦友が屍となられ、生存者は僅かだったとか。

高雄港で二、三日休んだ後、さらに南へ向って出港しました。船員さんが「魔のバシー海峡です」といつて乗員全員に注意をうながしました。左舷に陸地（ルソン島）を見ながら船は南へ航行しました。翌日入った港はマニラでした。

上陸して少し休憩の間に街を散策しました。自分には初めて見る外国の情景で、建築様式の異なった家並みが続いていました。「全員集合！」の命令があつて何かと思ひますと「次なる任務に励め」ということで、その任務は「クラーク飛行場の整備を行え」でした。

一木一草も無い荒涼とした炎天下で鶴嘴とシャベルで大地に向うのです。玉のような汗が全員に流れ見る間に肌着は汗だくでした。このクラーク

飛行場には、第四飛行師団「翼兵团」等が勤務していました。ここで十日間ほど、一生懸命に汗を流しました。するとまた移動命令が発令され、急遽港へ走り、乗船しました。「興安丸」でした。

(体験者は六十余年前のことで、大部分が忘却しています。一生懸命思い起こして語っておりますが、その時の起こったことや、その日時などが前後して誤りがあるかも知れません。)

上陸したところは同じフィリピンでもミンダナオ島でした。プナ湾に入って揚陸作業を行うのですが、小さな艇で栈橋まで幾十幾百回と往復しての揚陸作業は大変でした。砲兵は砲身と台車とに分解していました。自分たちは歩兵でも機関砲でしたために銃身と台座とに分解して搬送しました。揚陸作業は三日ほどで完了しました。

四日目に、グラマン米軍飛行機が幾十機も来襲しました。人員や兵隊は「退避！」の声で、蜘蛛の子を散らすのごとく身体を遮蔽しました。敵弾が輸送船に命中し、弾薬や燃料が爆発、炎上しま

した。貨物は半分ほど船倉に在ったために後々食糧不足で大変苦勞することになりました。

ここミンダナオには沖縄出身の日本人で「赤嶺かな」という女性がおられ、立志伝中の人です。大会社を興し、大地主で麻を栽培し使用人も万余の人を使っていました。「マニラ麻布製造会社」という、私たちの分隊が港湾残務整理で残り、この赤嶺かなさんの会社に寄宿しました。

一週間ほど後に「本隊に急進せよ」との命令で目的地に到着しました。しかし部隊はピナワンへ転進してしまいましたのでまた「急進せよ」との命令が出ました。「ジャングルの山を越してダリヤオンへと移動となり、第十三航空地区司令部の傘下に入りました。作業は椰子油や砂糖きびしぼりで、ほかに野菜類や特に薩摩芋作りなどに努力しました。

昭和十九年十一月から司令部の衛兵を命ぜられました。隔日に二十四時間勤務です。三月二十日ころでした、小型爆薬及び導火線の試験を行って

いました。高射砲小隊長の中村少尉が、誤作動で爆発、爆死されました。本部より検死官が来て検証を行い、ご遺体は安らかに眠れと北枕にして安置し、その夜、私は屍衛兵を勤めました。

翌日、茶毘に付し、ご遺骨を箱に納めました。行年二十一歳でした。可哀想でした。でも戦場にて茶毘に付し、遺骨箱に納められたことは幸せな方です。以後の戦死者はすべて「草むす屍」でした。

その後も引き続いて司令部の衛兵勤務に服していました。同年兵の松本精助一等兵が外出して留守になっていたときに、丁度監督官が見回りに来ました。「松本一等兵、重大な任務放棄だ。軍法会議だ」という事件がありました。

機関砲分隊は一個分隊十二人で砲係が七人、五人は小銃射手でした。前線では穴を掘って砲を、岩、石、樹木などで遮蔽して砲口のみ敵対するごとく布陣します。

米軍の観測機が飛来しました。何度となく上空

を飛び回っていました。そして高々度に飛び上って、発煙筒を落としました。「この下に日本軍在り」との通信かと思えます。すると僅か数分後に、長距離砲の砲弾が幾十発も飛んで来ました。友軍陣地がその餌食となったのです。うっ蒼たるジャングルが瞬時にして、焼野原となりました。

ただその威力に驚くばかりですが、その上に飛行機による油製焼夷弾も大変な威力を持っています。一発落下すると、その近辺は、あつという間に火の海になりました。私たちの陣地は二度か三度の空爆や艦砲射撃で終わったと思います。

昭和二十年八月十四日より砲声や飛行機の爆音もパタリと止まりました。明けて八月十五日十五時、「航空甲地区司令部発令」の通信を受けました。「停戦命令」でした。一瞬、嘘や誠か、我が身を疑いましたが事実でした。それも無条件降伏でした。

九月九日、部隊はタリヤオン草原に集合せよとの命令がありました。米比軍（現地人の米国協力

隊）がおり、彼らの指示よっての武装解除でした。米軍兵士も少しはいました。

広い草原に幾百もの「テント幕舎」を張り、一張に十二人ずつ割り当てられました。約二カ月間、なにごともなく、幕舎生活をしていました。

昭和二十年十一月、「ダバオに向いて行進せよ」とのこと、トラックに乗ったときもありましたが、徒步行進では、現住民の「襲撃」が注意でした。今も忘れぬ罵倒の声「裕仁パタイ」「山下パタイ」と天皇陛下や山下奉文大将の首切りの真似をします。そして各人に対しては「泥棒！」の罵声を女子や子供までが叫んでいました。

米軍の上陸用リバティー型輸送船に乗船させられ、途中台風に遭遇しましたが、無事横須賀港へ上陸しました。そして海軍通信学校にて検閲・検査を受けました。

ここで復員の命令を受け、列車に乗って福井へ帰り、我が家まで十三キロ夜道を歩いて帰りました。